審査結果の要旨

本論文の内容は、公開審査会（令和2年3月1日10時から12時20分、於京都府立大学附属図書館グループ研究室１）において説明がなされ、質疑応答が行われた。三輪論文の研究史上の意義と、審査会で提出された論点は以下の通りである。

○研究史上の意義

東大寺は、日本中世寺院の典型例として数多くの研究が積み重ねられてきた。東大寺領荘園の分析を通じた社会経済史研究に始まり、寺内組織構造の分析を通じた中世寺院形成史研究が進展し、近年では寺内で行われる法会・修学を論じる宗教史・教学史研究が重ねられている。なかでも古代官寺として出発し、中世荘園領主・宗教領主に転生したその歩みは、寺院の中世化を代表するコースとして注目されてきた。その特質を一言で言えば「惣寺」と呼ばれる寺僧集団の形成史である。しかし、「惣寺」の理解は論者によって異なり、具体的な内実は未解明のまま残されていた。

本学位請求論文は、12世紀から14世紀における東大寺の社会集団の変遷について、法会・財政・寺僧集団の三つの視点から論じ、「惣寺」の形成過程と実態の把握を目指したものである。その際、単に寺院内部構造の分析に拠るのではなく、各時代の寺内政治史を参照しつつ、寺僧の宗教活動とそれを支えた財源に着目し、相互の連関関係を考察する新し

い分析視角を用いた。その結果、下記の三点について新しい知見を得た。

一点目に、東大寺史を財政構造から分析することで、東大寺の経済構造全体が示された。特に鎮西米に着目し、封物の途絶に対応した中世的な財源確保とその運営方法を解明した点が新しい。多くの寺領を保有した荘園領主としての属性と宗教活動を行う宗教領主としての属性がここに統合され、中世権門寺院たる東大寺の活動の全体像と変遷を理解することが可能となった。

二点目に、従来、宗教活動のうち、修学・教学を実現する論義系の研究に偏りがちであったが、本論文は非論義系の法会にも着目し、東大寺に所属する多様な寺僧集団の宗教活動を明らかにした。これを糸口に、今後、学侶・堂衆・禅律僧の多様な宗教活動の相互の関係が解明されるであろう。

三点目に、「惣寺」について、その理念と実態とを峻別し、それぞれの形成過程と内実を具体的に明らかにした。東大寺を包括する理念としての惣寺が、実態としては学侶を中心とした寺内を横断する可変的な寺僧集団が主導するものであったとの指摘は、他寺院との比較の視点を提供し、また中世後期の東大寺社会構造の解明の出発点となりうるものである。

○審査会で取り上げられた主な論点

序章　①寺院社会史概念の問題点、②諸画期の理解への疑義、③建築史等への目配り
第一章　①12世紀尊勝院教学整備の理解
第二章　①十二大会の象徴性への疑義、②非論義会概念の妥当性
第四章　①別当による流用という理解への疑義、②12世紀の別当の個性
第五章　①鎮西米の移送方法
第七章　①鎌倉中期の別当の教学振興の意図
第八章　①寺僧が結集する意味、②南北朝期への展望
第九章　①惣寺集団の包摂範囲の確認
終章　①12世紀と13世紀の画期の理解

本論文は、諸現象の変化の原因として東大寺内部の要因を重視する一方、寺院を取り巻く政治社会状況への目配りが弱く、13世紀後半の「惣寺」確立への評価には若干の疑問を残すものの、中世前期の東大寺寺院社会の全体像を把握することにつとめ、「惣寺」の実態を解明することに成功している。よって、本論文は博士の学位授与の評価基準を満たしていることから、本委員会は本論文が博士（歴史学）の学位を授与するに値するものと認める。